

松山大学温山記念会館

2006年国の登録有形文化財
2017年西宮市都市景観形成建築物



クラウン硝子の窓

文化庁解説文

西面敷地中央の北寄りに建ち、東西20m、南北15mの規模で、RC造2階建、寄棟造、スパニッシュ瓦葺とする。表門からやや奥に建ち、正面に車廻しを付け、外観を洋風意匠でまとめ、堂々とした構えとする。昭和初期の有名建築家の建てた洋館として貴重。

当建造物は JR 甲子園口より南東に約1kmで疎水に沿って建設されているが外部からは石柱に支えられた幅6m位の木製門扉はあるが大きな植栽に囲まれて眺望は困難である。

しかし門より一歩中に踏み入れると、目前にスパニッシュ風の瓦（現在の瓦は最近原型を模して吹き替え、門衛所の瓦はオリジナルを注目）で覆われた2階建ての洋館が迫り、ロータリー形式の石舗道で玄関に導かれる。

当建物は、新田ベニヤや新田ベルトで財を成した新田長次郎が娘婿の建築家、木子七郎（愛媛県庁、石崎汽船設計）に設計を依頼し昭和3年（1928年）、（株）竹中工務店の施工で建造された。

木子七郎はこの建物を設計する前に欧州を見学してきたと聞くが、玄関の扉、窓（牛乳瓶の底を並べたようなガラス入り）、ニッチ、その他、2階のビリヤードの娛樂室、夫人の間、それにもまして、庭から東屋に見えるが立派な防空壕があり、防爆扉や換気設備を備え、そして裏道へも抜けられ防空壕の施設全てがすべてうなずけるように思える。もし皆様に見学の機会があれば、このような目で見ていただけると、より面白く、より理解を深めていただける事と思います。

母屋以外に裏庭に犬小屋がありますが、木子七郎のデザインと思われます。（登録文化財にし忘れた残念な思いがのこる）また表の扉もブロックで積まれているが、鉄柵の扉の残痕が残っているが、戦時中に鉄の供出で無くなっており、これも思いが残る。

そして名勝と言われても良い植栽のある庭があり、その中に池があるが阪神淡路大震災まで水を満水にしていたが、水の道が崩れたか水が枯れ現在は上水により補給されている。

この旧新田邸は、孫夫人新田篤子様より新田長次郎が残した松山大学へ寄贈された。新田長次郎の精神は昭和初期のモダニズムと共に大切に保存・継承されていく事と思います。

庭園の擬石について



温山記念館の庭園の特徴は、庭石などにモルタル製の擬石・擬木を大量に用いていることである。

「大石を人工製作せむと思ひ立ち、セメントを以て試作せるに一見本物の自然石と異らざるもの出来上がり自ら興趣を湧かしめた」(長次郎の自叙伝『回顧七十有七年』(1935))と、別荘である琴ノ浦温山温山荘園(和歌山県海南市)においては長次郎自身がその製作をおこなっていたらしいことは驚くべき事実です。

近代庭園で名高い数々の庭園は東京、大阪などでは大正末期より、擬石・擬木の工法が検討されたという。擬石手法が造園資材として定着したのは、東京の有栖川宮記念公園池泉擬石護岸および擬木橋(1934)、大阪の天王寺公園和風庭園擬石製滝石組(1933)、京都の都ホテル庭園擬石製滝石組(1933)など、昭和8～9年(1933～1934)頃であるから、大正初期においてすでに長次郎によって擬石製作が着手されていた琴ノ浦温山荘園(和歌山県海南市・大正初期)は、擬石・擬木を利用した庭園として、先駆的な事例であったらしい。この西宮の温山会館はその後の建設である。

(奈文研の栗野隆さん「擬石・擬木を用いた近代和風庭園」による)